

幼稚園入園狂騒曲

二・ニヨマン・アンナ・マルタンティ

●友人に頼まれて幼稚園探し

あつという間に学校の休みが終わり、新学期（訳注1）が始まった。そして、多くの親たちが子どもたちの学校を探すのにてんてこ舞いだっただけの季節も過ぎた。

これまでほぼ一カ月の間、親たちは、子どもたちを頭のいい子にし、しつけもきちんとしてくれる学校をあちこち探し回る忙しい日々を過ごしてきた。家族にとつて十分な生活の豊かさを保障したい、と切に願う気持ちから、職場で忙しく働いている親たちは、子どもたちの教育と心身の成長を、学校で教える教師たちに全面的に託そうとするのである。

子どもたちのために、今や流行となつていく教授法に沿った最高の教育を受けようと、親たちはポケットの奥深くまで探すと（訳注2）を厭わない。そうした親たちの学歴は大学卒で、教育の世界の発展ぶりについての情報をよく知っている。そのため、彼らは息子や娘が生まれたときから最高の教育を与えたいと考え、自分たちの望むような子どもになつて欲しいと願う。

昔よりもよいと考えられる教育理論や教授法が現われ、それが流行となり、「子どもの教育にとつて最良の場所である」と謳う学校間のビジネス競争を煽るのである。

私は、友人に頼まれて、彼女の四歳の子どものための幼稚園探しを手伝うことになった。「いい幼稚園を探してちょうだいね。この子が読み、書き、計算が得意になって、英語ができて、野外活動がいっぱいあつて、設備が揃つている幼稚園を探してね」と言われた私が何か言い返す間もなく、彼女はまるで逆らうことができないような命令口調で、「忘れないでよ。十分訓練を受けた優しい教師、最新の教授法、そして確実に国際標準であること！」と要求を続けた。

彼女が会社での仕事が多忙で、家庭主婦として過ごすべき時間の大半を仕事に取られているのがよく分かつていたので、私は、彼女の言うような幼稚園を探すため、マカッサルの街中をあちこち歩き回った。実は、そうした様々な優位性を持つ幼稚園の情報を得るのは簡単なことだった。地元新聞には、一カ月ぐらい前からほとんど毎日のように、マカッサル市にある幼稚

園での卒園行事や授業プログラムなど、あらゆる情報が写真つきで社会欄に載っている。それ以外にも、新聞広告、路上の垂れ幕、パンフレットなど、あるいはショッピングセンターで開かれる教育展示会などでも、情報を得ることができるのだ。

でも、私は直接出向いて、各幼稚園の経営者と話をすることにした。地元向けの幼稚園から友人が望むような国際標準の幼稚園まで、いろいろな幼稚園に出向いた。

●安いはずがない！

費用は安いはずがない。これが幼稚園の情報をいくつか集め回った私の最初の感想だ。ちよつと想像して欲しい。子どもを教育する理想の場所、と謳う国際標準のある幼稚園は、バナクカン地区のとある商業コンプレックスにあるのだが、入園料が二〇〇万ルピア（約二万七〇〇〇円）、教材費も同じく二〇〇万ルピア、年少クラスの制服代が一〇万ルピア、年長クラスのそれが三〇万ルピアもかかるのだ。

これには毎月の月謝がまだ含まれていない。月謝の額もクラスによって異なる。年



「国際標準」の幼稚園のパンフレット(筆者撮影)

少クラスは教師の使用言語によって額が異なる。英語で教える場合は四五万ルピア、マンダリン（中国語）で教える場合は英語よりちょっと安く四〇万ルピアである。そしてもちろん、インドネシア語で教える場合はさらに安くて三五万ルピアになる。年長クラスはどうだろうか。このクラスではこれら三つの言語を混ぜて教えるので、月謝は五〇万ルピアになる。だから、友人が子どもをこの幼稚園の年長クラスに入れるとすると、毎月の月謝を含め、一〇カ月間で総額九三〇万ルピア（約一二万四〇〇〇円）を支払うことになる。

次に、やはり国際標準を謳う別の幼稚園を訪ねた。幼稚園の名前には採用した教授法の名前がつけられている。ペッター二通り付近の有名な住宅地にあるこの幼稚園も費用の点ではあまり変わらない。入園料は全クラスとも二五〇万ルピアで、年少、年中、年長第一、年長第二のクラスがある。異なるのは月謝の額である。年少クラスで三〇万ルピア、年中クラスで四〇万ルピア、年長第一クラスで五〇万ルピア、年長第二クラスで六〇万ルピアである。これらの費用には、幼稚園バッグが一つと制服三着がセットに含まれている。

ラトゥランギ通りにある別の幼稚園は、近代的でなおかつ宗教色の強い教育システムで経営しているが、入園料は三八五万ルピアで、これにはすべてのクラスの施設利用、遊具、教育器具、制服の費用が含まれ

ている。月謝は、年少クラスではインドネシア語で教える場合は二〇万ルピア、英語で教える場合は三五万ルピアである。年長クラスはインドネシア語と英語のバイリンガルで教え、月謝は三五万ルピアである。別の友人から、プガヨマン通りに新しくできた幼稚園があつて、そこは宗教色の濃いコンセプトの教育で売り出している、という情報を聞いた。友人からは、「子どもがより宗教に熱心になり、お祈りもきちんとやるようにしてくれる幼稚園を探してくれ」とは言われていないけれども、まあ話を聞くのはいいだろうと思つて、行つてみた。そして、予想した通り、質のいい教育を受けるためにはそれなりの費用が必要なのであつた。前述の幼稚園よりはやや安いけれども、この幼稚園のパンフレットによれば、年少クラスは入園料が二五〇万ルピア、制服セットが一五万ルピア、寄付金が一〇万ルピア、月謝が二〇万ルピアであつた。年長クラスは、入園料二〇〇万ルピア、制服セット二五万ルピア、寄付金一〇万ルピア、月謝が二五万ルピアだつた。

●売り文句と充実した設備

本当はほかにも、大モスク通り、ラテイモジョン山通り、サダン川通り、アザエラ地区、タンジュンブンガ地区、パッティムラ通りなど、あちこちに国際標準の幼稚園がある、という情報は聞いていた。そしてそれらの幼稚園はほとんど同様のコンセプト

トを提示していた。「将来が有望な子どもをつくりまします」、「先生は子どもに集中します」、「知能指数（IQ）、情動指数（EQ）、長寿指数（SQ）を高め、頭をよくするカリキュラム」、「子どもの創造力を伸ばします」など、売り文句はいろいろある。

国際標準の幼稚園では、登録開始の最初の頃に子どもを登録した親は、五〇%までの費用デイスカウントと分割払いが可能である。提供される設備やサービスは、静かでエアコン完備の教室、図書館、水泳クラス、絵画クラス、屋外活動や遠足、健康診断、外国から送られてきたガイドブック、マルチメディアパソコン、砂場、安全で栄養のある食事、ミス（*Mist*）とかアングル（*Angle*）とか英語で園児から呼ばれる国内外の有名大学を卒業した質の高い教師陣などまだまだいろいろある。

もちろん、収入が十分な親にとつては、高い費用など問題にならないだろう。それどころか、たとえばカルティニの日（*Cartini* 3）の行事、地球の日（*Earth Day* 4）の行事、郵便局訪問、田んぼで遊ぶ、などの追加費用も、子どもたちが参加してたくさんのお金を得ると思えば、支払うのも問題ではない。考えてみれば、シヨッピング・モールがキノコのようにあちこちに生えてくるような現代において、子どもたちが砂遊びをしたり、田んぼを見たりするには、まず支払いが先なのかもしれない。私が子どもの頃は、田んぼがまだたくさんあって、木々



幼稚園で歌を歌う園児たち (筆者撮影)

が遊び場になって、しかもいつも無料だったが、それはとても素晴らしいことだったんだ、とつくづく思うのである。

友人は「国際標準の幼稚園だけ探してくれば良い」と言っていたが、別の友人に言わせればどうってことはない普通の幼稚園の情報も探してみた。これらの幼稚園にはきれいな建物はないし、バイリンガルのクラスなどないし、広い遊技場もないし、教師も、幼稚園教師になるための特別教育を受けた年配の教師たちがほとんどであった。三つの幼稚園を見たが、前述の国際標準の幼稚園に比べれば、費用はずっと安かった。教育大学付属小学校の裏手にある幼稚園では、Aクラスの入園料が二五万ルピア、Bクラスが二二万ルピアで、入園料には制服三着を含み、月謝はそれぞれ七万五〇〇〇ルピアであった。

●高い幼稚園は解決策なのか？

数日前、近所のおばさんが、「子どもがまだ読むのができなくて、小学校の入学テストに合格できないんじゃないかって心配なのよ」と訴えてきた。夫の稼ぎは多くないのに、彼女は子どもが読めるようになるためにもっと費用を払ってもかまわないかと思っている。彼女によると、その子は、読

む勉強をしたり宿題をしたりするよりも、幼稚園で遊ぶほうが好きなのだ。でも、彼女は自分の選んだ幼稚園はかなり質がいいと思っっているのである。

私は、今の幼稚園の子どもたちが様々な行事や習い事でどれほど忙しくなっているのかを想像してみた。プルワダルミタ編集のインドネシア語辞典によれば、幼稚園の「園」(taman)とは「楽しくて幸せを感じる場所」を意味する、というのではないか。だから、幼稚園とは子どもたちにとって楽しくて幸せを感じる場所でなければならぬのである。遊ぶのが楽しいのであれば、それを禁止する必要などないはずである。

私は、七月七日付けの朝刊紙『コンパス』に掲載された、教育文化大臣を務めたダウド・ユスフ氏の評論記事を思い出した。彼によると、日本には「教育ママ」という言葉があり、いい教育を受けて物事をよく知っている母親たちが子どもたちの教育に対して大きな責任と役割を持っている、ということであった。西洋では、高学歴の女性が仕事に就かずに家にいて子どもを育てる、などというのは無駄な時間にすぎないと思われるのだが、日本では、子どもの教育者としての責務を全うするため、母親は高学歴で十分な教養を持っていなければならぬと信じられている。仕事を持った女性でも、勤務時間を早めに切り上げて子どもが学校から帰る頃には帰宅し、子どもの勉強をみたり、教えたり、子どもの用

事に時間を割いてつき合うのである。

おそらく、幼稚園探しを頼んだ友人を含む親たちは、こうしたことをしばしば忘れてしまっただろう。彼らは会社内外での仕事や、社会活動や、その他様々な用事で忙しく、子どもを教育することは親の責務であるという、親としての重要な役割を忘れてしまっただろう。だからといって、最新の教育手法を導入し、設備も充実していて、教師の質もよい学校や幼稚園に子どもを入れることで、子どもの教育を親の責務から切り離せる、ということには決してならない。だって、子どもの気持ちを一番理解できるのは親自身ではないのか。

お金を湯水のように使っても、幼稚園に行った子どもが幸せではない、ということにならないようにしなければならない。費用の高い幼稚園は、子どもを頭がよくて个性的にするように教育するための最良の解決策では必ずしもないのだ。

友人の子どもは、幼稚園での生活を始めた。彼女が子どものために選んだ幼稚園のパンフレットに書かれているような目標が本当に達成され、彼女とその子どもが教育コマースリズムの犠牲にならないことを切に願っている。

(二・ニヨマン・アンナ・マルタンテイ / NGO「ルマ・カム」代表)

(訳注1) インドネシアでは一般に、新学期は七月から始まり、六月に終わる。

(訳注2)「ポケットの奥にあるお金を探す」という表現から、費用の支払いを借しまないことの比喩を表わす。

(訳注3) カルティニ (RA Kartini) (一八七九―一九〇四年) は民族主義運動および女性地位向上運動の先駆者で、社会変革の担い手として女性を育成するために私塾を開いた。国家独立英雄と定められた彼女の誕生日である四月二一日を「カルティニの日」と定め、彼女の功績を称える祝賀行事が全国で実施される。

(訳注4) 地球の日。アースデイとも呼ばれる。一九七〇年四月二二日にアメリカの学生デニス・ヘイズが呼びかけて開始。以来、四月二二日が環境問題への関心を示す行動を起こす日となった。インドネシアでは環境系NGOなどが中心となってイベントを開催している。

〈訳者による解説〉

筆者のニ・ニヨマン・アンナ・マルタンティは、「ルマ・カム」(若者たちの家)というNGOの代表で、教育問題、とくに学校教育の弊害とオルタナティブ教育の可能性について関心を持っている。

彼女が代表を務める「ルマ・カム」は毎年、南スラウエシ州内の高校生約二〇人を選抜し、約一〇日間、村に入ってホームステイしながらフィールドワークを行う「ユース・キャンプ」を実施している。五年目

を迎えた「ユース・キャンプ」には三〇〇人以上の応募者があるほど、地元では人気のプログラムとなった。

マカッサルのような地方都市でも、受験競争は年々過熱してきている。大学に入りやすい高校、その高校に入りやすい中学校、その中学校に入りやすい小学校、といった形で、それが幼稚園選別にまで及んでいる。文中にある「国際標準」とされる幼稚園の費用の高さもさることながら、いい幼稚園や学校へ子どもを入れようとする親は、なかりふりかまわず、手段を選ばない。それは、私立校よりもむしろ公立校でひどい状況になっている。

一般に、公立校は予算が少なく、教師の給料が低いのは有名な話である。いい公立校に入るためには、教師や校長への付け届けだけでなく、とくに金持ちの親は通常支払う額の倍以上の額を寄附と称して学校へ支払う。政府高官や民間企業経営者などは電話で子どもの入学を校長に直接頼む。合格者数にはすでに政府高官や企業経営者の子弟の枠が設けられており、その枠に入れないコネのない子どもたちにとって、実際の競争率ははるかに高くなる。入学試験ではカンニングが横行するが、教師がそれを黙認しているという批判があつて、民間人が試験監督をするケースが現われた。しかし、実はその民間人は特定の子弟が合格するように監視している、といった具合なのだ。

私の運転手の息子は、成績優秀だが何のコネもないため、平均点よりはるか上の得点にもかかわらず、最初の高校受験で不合格になった。次に受験した高校では合格したが、入学時費用の一部しか払っていないとの理由で、あやうく合格を取り消されうになり、慌てた運転手が訳者に借金を申し出る事態になった。

こうして、裕福でコネのある家の子どもたちが、正当な成績評価を捻じ曲げてでもいい教育を受けていく一方、貧しくてコネのない家の子どもは、どんなに優秀でもいい教育を受ける機会からは弾かれていく。

訳者は、南スラウエシ社会は上層と下層の垂直移動が非常に少ないとみているが、こうした教育の現場でその構造が再生産されているのではないかと思えてくる。そして、子どもたちは、学校を舞台に大人が展開する贈収賄や不正の現実を肌で学び、いざ社会へ出て行くのである。この学校教育の現場にメスを入れない限り、汚職撲滅や法秩序の確立は無理なのではないだろうか。国際標準の幼稚園で学んだ裕福な家庭の子どもたちも、マカッサルにいる限り、この後、こうした教育の現場へ入っていく。彼らが将来、何かを変えていけるのか。現状にさらに拍車をかけるだけではないのか。教育の問題は、インドネシアの将来を決める重大な問題である。

(まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員)